

プロジェクト名：幼児児童における他者の異質性の受容と拒否—共生価値の初期発達—

代表者：首藤 敏元（教育学部・教授）

1 研究の目的

本研究は、共生価値として他者への寛容さに焦点をあてる。そして、他者の異質な行動として社会道徳的な逸脱行為と偏りのある嗜好性を取り上げ、それらの異質さの種類が幼児の社会的判断と仲間受容判断に与える影響、および受容場面の性質（公的、私的）が受容判断に与える影響を検討し、幼児期の寛容さの特徴を分析する。また、幼児は「人と違う行動や好みを変えたら、一緒に遊んであげる」とする意見に対して、正しいと考えているのかも調査し、幼児期の寛容さの発達を道徳的発達の観点からも吟味する。

2 研究の進め方

参加者 埼玉県内の私立 B 幼稚園 5 歳児 43 名と C 幼稚園 5 歳児 37 名（合計：80 名、平均年齢 5 歳 9 ヶ月）が研究に協力した。**実験計画** 2（性別）×2（異質さ—社会道徳的逸脱と偏りのある嗜好性）の要因計画、年齢は被験者間、異質さの内容は被験者内要因であった。**材料** 異質さとして社会道徳的逸脱の物語（意地悪、散らかし、危険行為）と偏りのある嗜好性を描いた物語（トカゲがペット、野菜が好物、ゴルフが好き）が 3 つずつ作成された。各物語にはその内容を表した 5 つのカラー図版（A4 サイズ）が用意された。図版の構成はテーマに即した導入場面（図版 1）、参加者自身とは異なる行動もしくは好みを特徴とする主人公の紹介場面（図版 2）、幼稚園内で先生から主人公を遊び相手として指示をされる場面（図版 3）、自宅で好きな友達を誘う場面（図版 4）、主人公に行動もしくは好みを変えた方がよいと主張する子どもの場面（図版 5）であった。また、社会道徳的判断と受容判断の回答用に、子どもの表情の変化（例、「強い怒り、弱い怒り、中性、小さな喜び、大きな喜び」）を描いた図版が用意された。**手続き** 調査は 2012 年 7 月、幼稚園内の個室で個別に実施された。参加者は図版を見ながら物語を聞いた。参加者は図版 1 と 2 を提示され、主人公の特徴についての説明を受け、好悪判断と善悪判断、自己決定性判断の質問に回答した。次に、参加者は図版 3 を提示され、公的（幼稚園）場面での受容判断を 4 段階で回答し、その理由を述べた。続いて図版 4 が提示され、私的（公園）場面での受容判断を同様に回答した。最後に、参加者は図版 5 が提示され、行動もしくは好みの変容を要求する意見への正当性について 4 段階で回答し、その理由を述べた。調査時間は 1 人約 15 分であった。

3 研究の成果

悪さ判断と好悪判断 2（性）×2（異質さ：社会道徳的逸脱、嗜好性）の ANOVA の結果、いずれの分析も異質さの主効果のみ有意（ $F_{(1,78)}=102.74, p<.01$; $F_{(1,78)}=40.57, p<.01$ ）になった。つまり、幼児は社会道徳的逸脱行動の方により「悪い」、「嫌い」と判断することが分かった。**自己決定性判断** 社会道徳的逸脱には 92%の幼児が「自由にできない、相談した方がよい」と回答しており、偏った嗜好性には 40.8%の幼児が「好きなようにしてもよい」と回答していた。ANOVA の結果、異質さの主効果のみ有意（ $F_{(1,73)}=28.59, p<.01$ ）であった。幼児は社会道徳的逸脱には自己決定性を認めず、嗜好性にはある程度「個人の問題」と認識していることが示された。

悪さ判断と自己決定性判断の結果は、本研究に参加した幼児が社会道徳的な逸脱行動と偏りのある嗜好性とを区別して認識していることを示した。この結果は先行研究（e.g., Shuto, 2006）の成果と一致している。つまり、5 歳になると、社会的認知の分化が始まり、道徳（moral）、慣習（conventional）、個人（personal）

という判断の枠組みとなる思考領域 (domain) が発達し、逸脱行動の文脈の性質をとらえて、社会的な判断ができるようになる。

受容判断 全体的に幼児の受容傾向は高かった。2 (性) × 2 (異質さ) × 2 (受容場面: 公的、私的) の ANOVA の結果、異質さ × 受容場面の交互作用効果のみ有意であった ($F_{(1, 77)} = 4.28, p < .05$)。幼児は、社会道徳的逸脱をする主人公を幼稚園場面においても私的場面においても同程度に受容していた。一方、幼児は偏った嗜好性をもつ主人公を私的場面よりも幼稚園場面で受容していた。幼児は教師の介入のない私的場面において、社会道徳的逸脱をする主人公よりも偏りのある嗜好性を示す主人公の方を受容しないと考えていた。

幼児は、社会道徳的逸脱行動に対して示した「悪い」「嫌い」という判断ほどには、それらの行為者を拒否することはなかった。公的 (幼稚園) 場面と私的 (家庭) 場面のいずれにおいても、逸脱行動をとった主人公と偏りのある嗜好性の主人公の両方に対して寛容であった。理由の分析から、寛容さを示した幼児は、逸脱を示す相手に仲間意識と思いやりを示していたことが分かった。本研究で取り上げた逸脱行動や嗜好性の偏りは、幼児期の社会生活においては、それほど異質ではないのかもしれない。「一人で遊ぶ」「仲間はずれになる」ことの方が、幼児の「なんとかしなければいけない」という道徳心と寛容さを刺激するのかもしれない。

変容要求の正当性判断 全体的に、どちらの行為の変容要求にも「正しい」と考える傾向が強かった。ANOVA の結果、異質さ × 性の交互作用効果が有意になった ($F_{(1, 75)} = 6.28, p < .05$)。つまり、女子は男子より嗜好性を変容させる意見を「悪い」と判断する傾向が強かった。

女子は嗜好性を変容させようとする意見に反対する傾向を強く示した。この結果は、女子の道徳的な発達が男子よりも進んでいることを示唆する。通常、共感性を質問紙で測定すると女子の方が高くなる。そのため共感性に基づいた道徳が女子の方でより早く発達することは予想できる。しかし、本研究の「異質さの変容要求の正当性」という質問は、「言論の自由」や公正さという価値と関係している。女子が「好きなペットを変えたら遊んであげる」という意見に、男子よりも「悪い」と判断することが強かったのは、女子の方が公正さの道徳においても早熟であることを示唆しているのかもしれない。

4 今後の課題

本研究は、幼児において、異質さへの悪さ判断と好悪判断、および嗜好性の変容要求への道徳的判断が、直接受容判断と関係するのではないことを示唆した。一方、排斥といじめに対する行動が、道徳的判断と関連して、発達的に異なって判断されることを示した研究もある。Shaw, & Wainryb (2006) は、5 歳児はいじめの被害者が従順になることをプラスに評価し、抵抗することをマイナスに評価する一方、7 歳から 16 歳の子どもは被害者が抵抗することをプラスに評価することを見出した。今後、寛容さの判断と行動の背景にある社会的認知のプロセスを吟味し、寛容さと社会的認知との関連を発達的に検討することにより、共生価値の初期発達についてモデル化する必要がある。

文献

- Shaw, L. A., and Wainryb, C. (2006) . When victims don't cry: Children's understandings of victimization, compliance, and subversion. *Child Development*, **77**, 1050-1062.
- Shuto, T. (2006) . Young children's socio-moral judgments about conflict situations between moral and conventional rules. *Japanese Journal of Morality Psychology*, **20**, 1-6. (Japanese)